

紅い花

プロローグ

琉 紅

紅い花

琉 紅

プロローグ

私は、生まれも育ちもこの沖縄。純粹な、『うちなーんちゅ』である。

白と茶色のトラジマ模様、猫の『ミミ』。
一緒にベッドに横になつたまま、テレビのリモコンのボタンを押した。

ちょうどニュースの時間で、凄い映像を目についた。

公園にある樹齢九十年の大木、ガジュマルが根こそぎ倒れ、道路の真ん中では、大型トラックが横転していた。

最大瞬間風速の記録を塗り替えた台風が、昨夜、沖縄本島を直撃したらしい。

「ウオー、すごい」

(確かに、夜中の窓の揺れは激しかった)

その台風は沖縄本島で荒れ狂つた後、雲達を引き連れて北へと去つていった。

そして今は青空が広がり、飛行機が次々に飛び立つてゐる

と、若手の女性アナウンサーは早口で伝えていた。

昼夜過ぎ、東京から友人が、何の連絡もなく遊びに来た。

「スープー^{うたき}歌木に行きたい！」

那覇で会つて、第一声がこれである。

「はい、デパート、スープー？」

空港からの移動中、タクシードの運転手にそう教えられたら

しい、そこがいいと。

じつと考えた。タクシードの運転手が観光客に勧めるからには、まさかスナック？ ということでもなさそうだ。

「あーーつ

と、秘密の暗号が解けて、つい声を発した。

サービス心旺盛な私は、彼らを喜ばそと、早速レンタカーを借りて那覇から離れた。

古代、神が沖縄に最初に上陸したといわれる『斎場御嶽^{せぢやうみやけ}』、今はパワースポットとして有名である。神話が残された鍾乳石の岩場、その祭壇の前で祈りを捧げるのである。

この場所の聞き間違いだつたのだ。発音が悪かつたのではと。

中学生の頃、遠足で行つた時は、駐車場に切符売り場兼資料館が細々とあつただけだったのが、今では少し離れたところ

ろに、大きな駐車場ができ、物産館まである。

暑そうな私の顔を見た、お土産屋のおばさんは、

「上等扇風機さー。これから御嶽うたきに行くんだつたら、持つて行きなさい」

私が観光客に見えたのか、おばさんは押し売りにも近い勧

誘だつたが、今となつては未来を予想する占い師にも思えてきた。

クバの葉でできた大きな団扇を買った。取説が同封されていた。

クバの大きな一枚の葉に、石をのせて、長い時間乾燥させると、硬くて軽い小麦色の葉に変わる。クーラーなんてない昔から、涼を取る道具として沖縄にある。形から、末広がありの縁起物。言い伝えによると、『神々はクバの葉を好む』と書いてあつた。

昔と変わらない山道を登り、頂上にある切り立つた岩場を通り抜けると、大海原が目前に広がつた。

真っ青にどこまでも続く海の迫力に友人等は魅了され、私も一瞬息をする事を忘れた。海と空がどこまでも続いていた。騒がしいセミの声も一瞬聞き忘れるほど、その風景に惹かれていつた。

(こんな青い世界があるんだ)

私は高校のとき学んだルネッサンス時代、地の果てがあつたという古代地図のことを思い出していた。

ふと、焼け付くような暑さを感じ、周りを見渡すが、こんな山の上に自動販売機や、アイスクリーム屋なんてあるはずもない。

(台風の後に来るところじゃないな)

お土産屋で買ったクバの葉を思い出した。友達のお土産に持たせようと思ったからである。

「助かった」

私は、急いで袋から取り出し、パタパタと自分の首元に風を通した。

(ああ、気持ちいい)

脳や眼球の血のめぐりが良くなってきたのか、水平線近く、緑色で僅かな厚みを持つた島に気が付いた。

大海原の手前に小さな島が、オアシスように存在するのである。

沖縄本島が横になつた龍に見えるのなら、この島はその左手に持つ玉のようだ。

(この世の終わり、又は始まりは、あの島の遠い海の向こうに違いない)

その小さな島の名前は『久高島くだかしま』。

小さな船が、白波を立てながら島に向かっているのが見える。

友人等もその方向を指差している。

(しかし、太陽の真下で暑そうだ。お裾分けだ)

衝動的に、私は島に向かつてクバの葉を煽ぎ、風を起こした。

遠く離れた小さな島に、勿論この風が届く筈はないのだが。

その島の砂浜を想像してみよう。

そして思い切つて六百年ほど、時を遡つてみる。

アスファルトの道路、セメントの建物が全て無くなる。
砂浜には、ガラスの破片や、ペットボトルも見あたらない。
海が人の手から自然に返され、純白の度合いを増していく。
波が優しく、真っ白な砂達と遊んでいる。

つづく